

地域とのかかわりの中から一般性を抽出することを目指した授業づくり

荒井 眞一

はじめに

実践報告に先立って、前田先生より総合学習や生活科の授業づくりにおけるアプローチの方法と授業づくりの成果の検討という、本分科会における継続的な研究課題がしめされた。引き続き前田先生からは、この研究課題へ向けた議論に実践から接近していくための基盤を形作るために、現在の教育現場における総合学習や生活科の状況についての意見表明が、参加者に対し求められた。

参加教員からは、地域との交流によるふれあいや様々な活動の成果に関する発言がなされる一方で、小学校における英語授業の難しさや学校と地域の実情が合致しないことに対する閉塞感などが表明された。これら発言を踏まえ前

田先生からは、後に残る活動と残らない活動を地域とのかかわりの中で吟味し、残る活動にみられる共通部分を見出す作業の中から教育実践における一般性を抽出することが、分科会の課題であることが述べられた。

以上のような課題設定の下で目指すべき実践の方向性は、社会をより深く見つめる目を養っていけるような学びの創造である。このような目を養うことを通して、地域という点から、より広い範囲への視野の拡大を図る。このための方法のひとつとして、本分科会においては、生産や労働における人々のありようについて具体的にとらえるような実践の方向性を視野に入れつつも、多様な実践から成果を吸収することをめざしている。

一 実践報告

1 山菜パラダイスⅡ

上ノ国町立湯ノ岱小学校 浜田 洋子

浜田報告は6年生1名、4年生2名の3名で行った実践の模様であった。報告者は、勉強を重ねることで自分達のふるさとが好きになれる子どもを目指し、教師ではない地

域の人から学ぶことを大切にしたい。内容については、ポイントを押さえつつ学習は子ども主体で進めるべく、何がしたいか学びたいかということは子どもたちに決めさせた。

四月に山菜料理会、五月にゼンマイ採りを行い調理し食べることで興味関心を引かせた。まとめでは調べたこと、わかったこと等を素材カードと料理カードという風にカードとして分けてまとめ記録し学びへとつなげ、完成したものを学校の廊下に掲示した。続く六月には、地元のお寿司屋さんに山菜についてインタビューをし、壁新聞に各自まとめて掲示した。さらには7月には自分の課題を設定し発展学習とした。6年生はドクダミを調べ採ってお茶に、4年生は気になる山菜を調べ、それに関わりのある地域の人にインタビューした。九月には児童の祖父の協力でラクヨウ採りをし、食べる・食べられない物を知った。また山菜おこわの作り方を学び、学年末の三月にはゼンマイの煮しめを子どもたちがお世話になった地域の人に配った。

以上のような一年間を通した実践の様子は、写真を多用した効果的な資料によつて、生き生きと伝えられた。参加者からは、地域の他者とのかわりの中で体験を行わせることの重要性が、複数回表明された。

2 地域を知る活動

〈道東酪農地帯で考える総合的学習〉

釧路市立徹別小学校 淀野耕太郎

淀野報告は、酪農の発展を通して豊かな生活の実現を願う報告者による、乳製品を中心としたもの作り実践の記録であった。昨年度報告された実践と同趣旨の報告であるが、今年度報告ではより綿密な計画のもとで授業実践を行った。見学に際しては事前に子どもに調べ学習を行わせパンフレットを作成させた。体験学習に際しては、ミニ新聞も作成させた。時間的な都合はあったものの、農園学習では子どもたちに対して報告会も行わせた。

参加者からは、地元で生産された牛乳が他地域へおくられて商品化されているというような現状を教材化していくような実践の方向性に関する質問が出された。このような方向性は、より大きな問題の考察へと子どもたちを導きうる可能性を持ったものである。葛保先生からは、農業学習は生産や生産関係に行き当たる可能性を大きく有した題材であり、今後の展開が待たれるとの総括がなされた。

3 子どもがマチの未来を語る

中頓別町立中頓別小学校 山本 民

山本報告は、中頓別小学校で六年間にわたり続けられている「中頓別探検隊」という取り組みに関するものであった。実践ではまず、「生活職人」と名付けられた地域の方々にゲストティーチャーとして招き、子どもたちに直接体験の説明してもらったという。これら直接体験は複数回行われ、子どもたちはそれらの体験から一つを選び、「探検隊発表会」に向けたまとめを行った。

上で述べた子どもたちの活動は、さらに発展する。前年度に行われた「町を元気にするための提言」を踏まえ、今年度報告では「特産品を発展・発達させよう」という目標が掲げられた。この目標を具体化させたものとして子どもたちは、町を元気にする新メニューを提案し、試作・試食した。この活動に対して、地域の人々が積極的にかかわり、子どもたちの提案のいくつかが、実際に新商品として採用された。

参加者からは、ここまでの成果をあげた背景にある教師集団による問題意識の深まりが見逃されるべきではないとの意見が述べられた。若い教師集団によつて数か年にわ

たり重ねられた実践の深まりの成果が、報告実践において結実したといえるだろう。今後の展開が期待される実践であった。

4 学校祭演劇 1学年「平和の灯」

北海道白樺高等養護学校 亀井 清隆

亀井報告は、社会科で戦争についての授業を行った内容に関するものであった。その内容は主に報告者亀井氏が幼少期に体験したことが基になっており、授業後には生徒から家族から戦争の話聞いたなどという反応が返ってきた。また一連の学習の導入で広島平和記念公園への千羽鶴製作・献上も行った。

学生の興味関心に広がりを持たせるべく、報告者は学校祭での演劇に授業内容をつなげた。この劇は広島での原爆で被爆し、生き延びた少年の残した詩や日記にスポットを当てたものであった。この劇を通しての全体的な狙いは、言葉を発したり身体や表情などの表現力の拡大、他者理解、舞台セツトなどの制作による想像（創造）力、命の大切さを知ることなどであった。

昨年度報告における膨大な資料を基にした報告とは異なり、今年度報告では、報告者自身の目から見た戦争という

ものを、文献記述からは導きえないリアルな実像として描き出していった。報告者の実践的な懐の深さが痛感される実践であった。

5 「課題研究」の教育的価値と可能性の考察

〔高等学校総合学科における「産業社会と人間」

「総合的な学習の時間」の活用〕

北海道石狩翔陽高等学校 石川 幸孝

石川報告は、報告者の勤務する総合学科高校の特殊性に基づいて総合学習の可能性をしめすことを目指したものであった。報告者によれば、総合学科とは従来・現在の高等学校教育のアンチテーゼとして位置すべきものであり、普通科・職業科・専門科のように教育課程を作ることができないからこそ、殊に授業を新たな視点で作ることができるし、できなければならないものであるという。

前段で述べた問題意識を踏まえて報告者は、勤務校において新たな実践構築の枠組み形成を試みた。その枠組みとは、1年次における「産業社会と人間」、2年次における「総合学習」、3年次における「課題研究」を3年にわたるⅠⅡⅢ科目としてとらえ、「産業社会と人間」と「総合学習」を「課題研究」に取り組むための基礎科目として設定することである。

報告では、見学旅行時の課題が学習における学生のレポートが紹介された。参加者からは、現状を打破しようという積極的な試みに対する共感の声が聞かれた。

6 地域の施設めぐり（2年生活科の地域学習をどうすすめたか）

夕張市立ゆうばり小学校 齋藤 秀昭

齋藤報告は、1年間にわたり続けられた、小学校2年生生活科における地域学習の模様の報告であった。

夕張市では、今年度から地域の小学校が統合され、報告者も含め多くの子ども・教師がゆうばり小学校へ異動した。報告者によれば、多くの子どもが路線バスでの登校を余儀なくされることにより、危険と隣り合わせという状況が見られるようになった上、欠席する子どもの数も増加したという。また、統合されて開校したゆうばり小学校の校区は広く、子どもは多くの地域から集まっている。そのため、それらの子どもを並んで歩かせることも当初は困難であり、実践には多くの困難がついて回ったという。

以上のような厳しい状況の中で報告者は、1学期における郵便局や生活館の訪問を踏まえて、2学期には鉄工所の見学を行った。報告者によれば、将来の社会科学学習につながる生活科という方向性で行った実践であったが、目標は

達成されきつたとは言えなかつたとのことであつた。しかし、報告資料や報告者の発言の多くの箇所から、子どもたちが生き生きと学習していた様子や、温かい地域の人たちとの心温まる交流の様子がありありと感じられた。困難な状況の中で実践を継続する報告者の真摯な姿勢と、そのよ
うな姿勢の反映された実践報告に対して、参加者全員の意識が新たなものとなつた。

7 写真芝居

子どもたちの成長を共有する取り組み

江差町立南が丘小学校 中山 晴生

中山報告は、小学校1年生としての1年間を過ごした子どもたち一人ひとりの成長過程を、写真を通して保護者らと共有することを目指して行った実践に関するものである。報告者によれば、報告者の勤務校に都市部から移動してきた保護者達には独特な意識があるという。これら保護者達に対して報告者は、教師の側からの積極的な働きかけによつて交流を図つていった。

年度末も近い2月末に、報告者は年度最後の授業参観を行った。この授業の中で報告者は、子どもたち自身自身が綴り方で記述した思い出とその記述に対応した写真を、スライドとして提示するというものであつた。スライドは、

20名の子どもたち全員分が、参観授業の中で保護者達に示めされた。

参観授業の後、約2週間にわたる学級通信の発行の中で、参観授業の内容を深めたものが保護者らに配布された。それら通信を通して報告者は、報告者自身がそれぞれの子どもをどう見ていたのかという事を伝えるときに、それら一連の内容を他の保護者達とも共有することを試みた。

総括的な議論では、PTAや行政といった集団とのかわりが指摘された。ほぼ例年報告を行っている中山氏の子どもを見る目は常に暖かく、また実践の切り口もまた常に鋭く深い。このような実践の継続的な報告が、今後も大いに期待されるところである。

一一 総括

ここ数年参加者数は1桁台が続いたものの、今年度参加者数は2桁にとなった。教育大札幌校学生の参加も見られ、分科会における質疑応答にも活気がみなぎつていた。

昨年度から継続して参加された方も複数おり、昨年来の議論の経過を踏まえた有益な議論が交わされた。また若手教員による報告と中堅・ベテラン教員の報告がバランス良く配置され、見る側にもとても興味深い報告が相次いだ。

ただひとつ悔むべきは、例年に比べレポート数が多かったため、最終での総括討論が短縮されてしまった点である。しかし、時間配分という点で反省すべき点はあるものの、これとても一つひとつの報告に対しての質疑応答が活発であつたがゆえのことであり、参加者の満足感に水をさすものではない。

今回、分科会報告資料の作成に際しては、北海道教育大学札幌校2年生の埜林真生・森廣菜月両名による総括的な考察を、資料の一部として採用した。執筆分担者として両名の名を記させていた。

(札幌大谷大学)